

漁村コミュニティの変化に関する研究

－ 沖縄県宮古島市平良池間を事例として －

Keywords

コミュニティ 集落
社会集団 漁村



AK11012 石山 譜文

1. はじめに

1.1 研究背景

近年、都市部ではほどよい距離を保てる近居や隣居、二世帯住宅など、親族で助け合えるような住み方が発展しつつある。ところが逆に、老人の介護や子供の世話に負担を感じてあえて近くに住まずに、助けが欲しい時は、遠くの親戚より近くの他人という考えも出てきている。

また、現在日本では高齢化が大きな問題になっている。近くの他人と言っても高齢者が多く、助け合うことが難しい。さらに、家庭内問題や孤独死に周りの人が気づかないことがたびたび聞かれる。一方地方では、周りの人との関係が上手く保たれている。高齢化が進んだ地方ではどのようなコミュニティがあるのだろうか。

一般的に、コミュニティとは一定の地域に居住し、所属関係を持つ人々の集団だが、今までは、論者の立場、時代、場所によって様々な定義付けがされてきた。様々なコミュニティの定義があるが、共通していることは、同じ地域に居住して利害を共にし、政治、経済、風習などにおいて結びついている人々の集まりのことである。一方、社会集団とは共通の目的や関心を持った集団である。コミュニティを構成している集団が社会集団であり、社会集団はコミュニティの器官である。

1.2 研究目的

本研究は、現在地方ではどのように人が関わりを持っているかを社会集団に着目して究明していく。特定の社会集団は何のために形成されたのかをインタビュー（時間、場所、行動内容）によって探っていく。そして、地域コミュニティを組織する要素を発見する。

事例としては、沖縄県宮古島市平良池間を対象とする。その理由は、村の主な生業であった漁業が衰退していること、高齢化が進んでいることに加え、儀礼集団などの多くの社会集団がコミュニティの組織に影響していると考えられるからである。

1.3 調査方法

調査期間：2014年7月29日から8月10日までの13日間

調査件数：住宅実測37件、インタビュー38件、集落図、マエザトムトゥ

調査地：沖縄県宮古島市平良池間

調査内容：フィールドワークを行い、聞き取り調査（ヒアリング）、住居とムトゥの実測とスケッチ、集落図の実測とスケッチの3つを行った。

・聞き取り調査（ヒアリング）：聞き取り調査は、インタビューシートを基に行った。インタビュー内容は職業や年齢、家族構成や親戚などの血縁情報、1日の生活パターン、ムトゥの所属、住宅の間取りと使い方、儀礼、池間島の社会組織やコミュニティについてなどである。

・住居とモノの実測・スケッチ：住居空間を把握するために、住居とモノを実測しスケッチする。それを基に図面を清書する。

・集落図の実測とスケッチ：集落全体を把握するために、植栽、敷地境界、屋根の形などをスケッチする。それを基に集落図を制作する。

2. 調査地の概要

池間島は北緯24～25度、東経125～126度であり、沖縄本島から南西方向約300kmの位置にある。この島は宮古島の1.3km北に位置していて、宮古島から池間大橋で繋がっている（図1）。池間大橋は全長1,425mあり、1992年に完成した。池間大橋は重要な交通網のほかに海を眺められる観光スポットにもなっている。池間島の面積は約2.83km²で、周囲10.1kmである。人口は670人で世帯数は360世帯である。

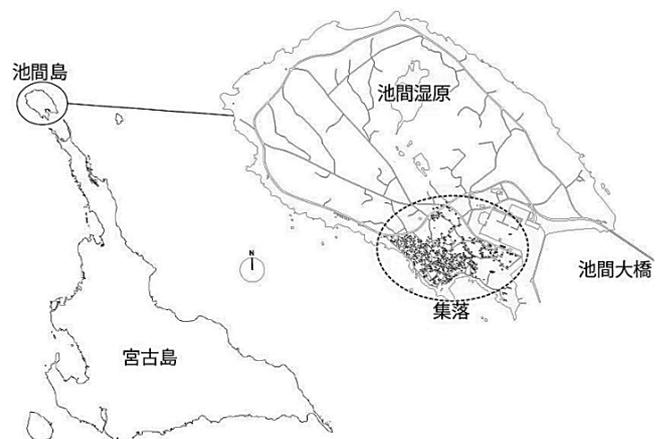


図1 池間島の位置

3. 社会集団

ここでは、本研究で対象とする以下の社会集団について述べる。

3.1 人々の日常的な関係

里家とは隣り合った家の人びとのことを指し、隣の家のことを自里(サトゥ)という。池間島の社会組織の中では最小の単位となっている。日常生活で協力し合っている。里家が協力し合うことは味噌作り(かならず交代で行う)、吉凶禍福の時の雑用(例えば死者の棺を親族が担ぐと、使者を見送る人がいないと思われるから)、家の建築や改築、病気の時、祝いなどである。

井戸も社会集団が生まれる場所である。水を調達する時に、家から近い井戸から水を汲む。その時に、井戸の周りでは女性がよく談笑する場所になっている。島に井戸は全部で9か所あり、使う場所は決められていない。

3.2 儀礼集団(ムトゥ)

ムトゥとは始祖集団である。ムトゥの意味は「元」であり、先祖である。理論的に言えば、各ムトゥに所属している人の先祖は皆同じであり血縁関係にある。しかし池間島の場合、特別はっきりした血縁原理を持っていない。さらに、今では血縁意識をほとんど抱いていない。何故ムトゥが必要だったか、どうやってできたかは明らかになっていない。

池間島には字池間に3つ、字前里に1つの合計4つのムトゥがある。字池間には①アギマス・ムトゥ②マジヤ・ムトゥ③マイヌヤ・ムトゥ、字前里には④マイザト・ムトゥがある。昭和34年以前は51歳でウヤマスをするようになっていた。ウヤマスとはムトゥへの加入儀礼である。しかし、高齢化の影響で老人が増加したので56歳に引き上がった。

3.3 里神集団

大柱(おはるず、ナナムイ)の御嶽(うたき)は宗教の中心であり、集落全体の守護神であり、島の創始者と信じられている。里神は御嶽(うたき)の一部で、池間島に10ヶ所分布している。個人や各家単位の願いなどはここで行う。里神集団はひとつの里神を信奉する人々によって組織されている。下図はトゥヌガナスという里神の1つである(図2)。



図2 トゥヌガナス

3.4 経済的集団

カツオ漁船の組合は乗組員の数で利益を分配しているので、不漁が続けば乗組員の家族は共に困る。そのようなことから同じ組の家族たちは他の船の組合員に対抗意識を持つようになる。

3.5 血縁的結合ハラウズ

ハラウズは双系的な親族関係を指す言葉である。組織範囲は、2親等に叔父叔母、従兄弟、祖父母の子と孫で、父方母方双方にとって平等である。しかし、実際は個人の好みや過去のいきさつによって、付き合いの範囲は様々である。

ハラウズの協力範囲はお祝いの時の招待、不慮の出来事の時協力、心配事の相談、葬式の時の手助け、家の建築や改築の時の労力提供(最後まで手伝う)、市議や漁協理事の選挙時の協力である。しかし、物品や金銭の贈与は慣習が広がりだしたらきりがなくなるので、親族間でも狭い範囲で行われる。一般的には夫婦の本家と妻の実家のみである。

3.6 トウンカラ・アグ

トウンカラとは一緒に寝ること、アグは友達を意味している。部屋に余裕のある家はその家の子供と同姓のトウンカラ・アグと一緒に寝泊りする。その家の父母をトウンカラヤー・ヌ・ザ(ンマ)と言う。トウンカラ・アグは変わることはあるが終生仲が良く、アグの妻子の面倒を見たり、経済的に援助したりもする。

かつては、共同で畑の仕事なども順番に役割分担していた。ほとんどが女性のトウンカラ・アグのグループで4人から8人で構成されていた。

4. 分析 現在の社会集団

4.1 近所付き合いと里家(サトゥヤー)

近所付き合いの内容と時間や頻度について特徴がみられた。他の社会集団と比較するとこのように機械範囲の集団が頻繁に関わっていることが分かる。内容については、雑談や世間話、特に近況報告が多い。近況報告を毎日、道端で会う時に話していると、お互いの状況が把握できる。島民は、毎日来ていて話をしている人が、来ない時があると心配をして電話などをやる。これは安否確認の役割を果たしている。実際に、インタビュー対象者の84%が単身者や夫婦のみで暮らしている(図3)。池間島での近所付き合いはその意味で重要である。

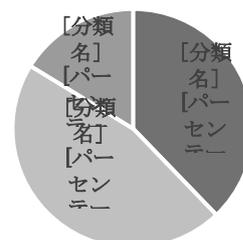


図3 単身者、夫婦のみの家族形態の割合

時間と頻度についてはばらつきがみられたが、関わっている時間は1から2時間がほとんどだった。関わる場所については道や家が多く、近所の人々が普段集まる場所が決まっている。特に、日常的に集まっているところ。それらはベンチや机などがあるところや海辺の近くである。たとえば、ベンチに座って休みながら話したり、机で軽作業をしたり、お茶やお酒を飲んだりしながら話をする。

4.2 儀礼集団（ムトゥ）

ムトゥの配置を見ると、各ムトゥにまとまりがなく、分散していることが分かる（図4）。池間島の集落は、字池間が最初にあり、その後に字前里ができた。これほどのばらつきがみられるのには原因がある。それは、字池間に住んでいた島民が、分家するときに、字池間はすでに土地が空いていなく、字前里に家を建て住んだのである。そのため、集落全体に各ムトゥが点在している。ムトゥは日常生活ではほとんど関わりがなく、ミヤークヅツなどの儀礼のときにしか関わらない。

次に、ムトゥと血縁的結合についてである。ミヤークヅツの時は島外に住んでいる親戚が集まる。ミヤークヅツは3日間あるので、島外から来ている人は寝泊りする場所が必要になる。そこで、親戚の家に泊めてもらうことが多い。しかし、人数が多く泊まれない時は、宮古島の

ホテルや民宿などに泊まる。親戚が来たら自宅で宴会をする。夜まで宴会をやることもある。

インタビューによると、ミヤークヅツは豊作のため、津波などの災害のとき畑が被害を受けないためという話もあった。また、昔からの伝統でしきたりや慣習だから行っているという人もいた。御嶽（ウタキ）は何らかの経緯で池間島のために頑張ってくれた人を祀ったところである。このように本来の意味を認識している人もいるが、本来の意味を理解せず慣習的に行っている人もいる。

200年以上続いていると認識されており、また、ミヤークヅツでは島外の人が来ても受け入れることも従来と変わっていない。

4.3 経済的集団

現在、カツオ漁をしているという島民はいなかった。現在漁師である島民は、潜り漁などを行っている。池間島内で働いている人数に大きな変化はみられなかったが、職種には変化がみられた。第一次産業から第三次産業に変化していた。その理由は、漁業が衰退したことによって、それに伴う鰹節工場なども衰退したためである。また、子供たちが職を求めて池間島から出て行くため、部屋が余っていることと宮古島が観光地ということを利用して、民宿などが増加したと考えられる。



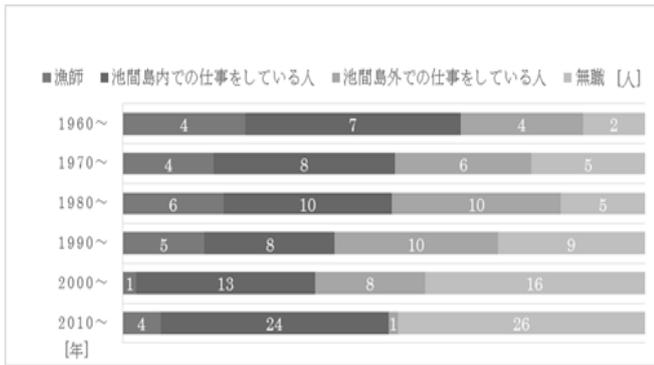


図 5 場所と時代別の就職人数と割合

次に、現在の仕事仲間の関わりについて着目する。現在は職業が多様多様になっているため、それぞれの関わりは確認できなかった。しかし、かつての同じ職業だった人同士については現在の関わりが確認できた。漁師だった人は、公民館で会ったり海岸でたまに話したりする。船員同士だった人は毎日道などで会う。働いていた頃は、船長の家で宴をしていた。大工だった人は、道端で会ったり、栈橋にお酒を持って集まったりする。

4.4 里神集団

里神集団は現在では全く関わりがない集団になっている。それは、里神集団の役職に就く人がなくなったからである。里神集団の役職者たちがなくなった理由は、受け継ぐ若い人がなくなったからである。

4.5 親族関係と血縁的結合（ハラウズ）

まず、池間島に親戚がいる場合は、毎日もしくは道すがら会った程度の頻度で関わっている。その時には、酒を飲む、食べ物の御裾分け、雑談、ご飯を食べる、挨拶などをする。

平良に親戚がいる場合において、親戚が来る頻度にはばらつきがみられる。平良で買い物してきてくれるなど、内容にもばらつきがみられる。池間大橋が出来てから来やすくなり頻度が上がったという回答もあった。

宮古島市外に親戚がいる場合は、いずれの回答もまったく来ないか年に4回来る頻度に収まっている。宮古島市外に住んでいる場合は、飛行機か船に乗る必要があるため費用と時間が掛かる。よって、この程度の頻度で訪れると考えられる。内容は、遊び、ミャークヅツ、キビ倒しの手伝いなどである。

4.6 トウンカラ・アグ

現在ではトウンカラ・アグは行われていない。トウンカラ・アグを行う理由がなくなったからである。子どもの数も少なくなっているため、空間的にも経済的にも間に合っていると考えられる。島民に子どもが少なくなっているため預ける必要がなくなったことが、トウンカラ・アグがなくなった理由である。

5. 考察

池間島のいくつかの社会集団の変化について分析をし

た。ここでは、社会集団の変化からみたコミュニティの変化について考察する。

池間島は元々離島であり、漁業を中心とした生業が主だった。そのため、外部と関わる機会が少なく、独自の文化や伝統が発展していった。コミュニティも独自に発展していった。島外との関わりが薄い一方で、島内のコミュニティは強固であった。

調査から、里神集団やトウンカラ・アグなどの伝統的な社会集団は衰退している。それは、池間島の若者が職を求めて島離れをして、島民の77%が高齢者であることが原因の1つである。一方で、日常的にある近所付き合い、友達や親戚などの社会集団は密である。

6. まとめ

池間島のコミュニティは、池間大橋が架かったり、カツオがいなくなったりなどの環境の変化に伴って変化している。現在の池間島のコミュニティは、環境が変化に対応した形になっている。環境の変化によって、柔軟になることが重要である。今回の分析で、環境の変化に伴っている池間島のコミュニティの特徴を掴むことができた。現在に残っている社会集団と、逆に衰退した社会集団がある。なので、現在残っている社会集団には重要な役割があると考えられる。

また、伝統的な社会集団が希薄化している一方で、近所付き合いや友人関係などの日常的な社会集団の関わりは、密になって残っている。現在でもある社会集団は、現在の島民にとって重要である。近所付き合いや友人関係を頻繁に行われているには理由がある。現在の池間島では少子高齢化や主な生業であったカツオ漁業の衰退の問題がある。近所付き合いや友人関係は、島民がお互いを把握することと、話をする事で安否確認、情報交換やストレス発散する役割を果たすだろう。人は話す相手がいないと塞ぎがちになってしまうことがあるし、誰かに何かを話すだけでスッキリすることもある。島民がお互いを把握することは、孤独死や家庭内暴力に周りの人が気付かないという問題を防止していると言える。

カツオ漁業の仲間、里神集団、トウンカラ・アグなどの伝統的な社会集団は希薄化している。しかし現在でも、ムトゥについては帰属意識がある。島民は所属するムトゥを認識している。ムトゥの分布は分散しているが、ムトゥの儀礼であるミャークヅツは今でも島で一番大きい行事になっている。ムトゥは池間島の特徴的な社会集団であり、アイデンティティの象徴の1つであるといえる。

参考文献

- 1) 吉原直樹 斎藤純一 伊豫谷登士翁『コミュニティを再考する』平凡社新書2013
- 2) 蓮見音彦 奥田道大『21世紀日本のネオコミュニティ』東京大学出版会1993
- 3) 野口武徳『沖縄池間島民俗誌』未来社1972